

◆ 2024 年 度 活 動 報 告 シ ー ト ◆

団体名：埼玉大学有機農業研究会

27A-09

代表者：代表理事会長 中里 和浩

URL : <http://saitama.eco.coocan.jp/> <https://twitter.com/saidaihozyou>

1. 活動が必要とされた状況

学外の畑（五関ほ場）付近は、都市化の進展に伴い、農地が著しく減少し、残された農地も管理されないため、特定外来生物等（アライグマ、ハクビシン等）による作物への被害は拡大している。また、雑草等が繁茂すると、ダニ等の病害虫の生息場所となって、近隣住民への健康への影響も懸念される。このため、休耕地を有機農業により耕作することにより、自然循環メカニズムを活かし、人間と生物が共生し、いのち響き合う場を創るとともに、市民と農家と学生が交流し、自然や環境、地域社会のあり方を学ぶ場を提供する必要がある。

2. 活動の内容（実施時期、参加人数、活動内容など）

元々田んぼで長年耕作されなかったため、2022 年度から緑肥作物（白・赤クローバー、ヘアリーベッチ）等を栽培し、土壌改良に取り組み、農業機械・農具等の格納のための農具小屋を設置し、野菜等の栽培を始めた。当初、小麦、大豆を中心に栽培したが、2023 年度から里芋、五関菜、今年度から長ネギ、ジャガイモ、ナス、シシトウ、サヤエンドウ等を栽培した（週 1～2 回、学生 2～3 名、社会人 1～2 名）。

3. 活動の成果

小麦の収穫後、作付した大豆は、夏の集中豪雨と猛暑による発芽不良に見舞われたが、枝豆、大豆として収穫でき、2 月に収穫した大豆を使って、豆腐・味噌作りを行った。また、ジャガイモ、長ネギ、ナス、シシトウ、地元の伝統野菜五関菜等も作付し、予想以上に収穫でき、今後、作付を拡大したいと考えている。ほ場の土質は、相変わらず固いが、ほ場の北側を中心に種類が代わってきており、テントウムシ等の益虫が生息し、鳥も見られる。学生は、有機野菜を作る経験を通じ、自然の豊かさ、有機農業の素晴らしさを体験できた。この間、上手く生育しなかった里芋は、大量に収穫することができ、大学祭に出店し、野菜の美味しさや有機農業の魅力を伝えた。



五関菜の収穫



里芋、大豆の栽培

4. 今後に残された課題

夏の高温、害虫の発生等により収穫できたものの更なる改善のためには、有機農法に関する知見・経験を積み重ね、作物管理や作業要員の確保が引き続き課題である。この点を解決するために、有機農研〇Ｂや近隣住民に栽培活動に参加してもらえる仕組みを構築していく必要がある。